

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】

vol.
42
2019 WINTER



筑波大学
University of Tsukuba

04 「聴」真田久 教授

08 「TSUKUBA OBOG」鈴木成一 氏

10 「附属学校めぐり」筑波大学附属中学校

12 「躍動 筑波大生」川瀬宙夢さん／館下智子さん

14 「Homeland」ウエハラ・ファン・マルティンさん

16 TOPICS | 23 世界のトピラ | 24 リレーメッセージ

表紙の写真：

宗教学の学説史のテキストを分析し3Dプリンタで立体として出力したモデル。西洋古代思想の文献の「意味」をわかりやすく把握・共有できるようにした視覚化や可触化の手法を教材作成にも応用し、本学の宗教学の授業で実際に使用しているもの。それぞれの学説の要となる概念間の関係を、初学者にも理解しやすくしている。人文社会系（哲学・思想）土井裕人助教による。



古代ギリシャから東京へ

日本人はオリンピックに何を求めてきたのか

（ 体育系
真田 久 ）
教授

Hisashi Sanada

アスリートはもちろん、開催地や観戦者にとっても特別なイベントであるオリンピック・パラリンピック。日本では、2020年の東京大会を含めると、夏・冬合わせて4回も開催されており、これはアメリカ、フランスに次ぐ多さです。元来は宗教的な意味合いを持つセレモニーであった古代オリンピックが、スポーツや文化の祭典として近代ヨーロッパで復活し、さらにこれほどまでに日本で受け入れられた要因は何か、歴史研究から探ります。

■オリンピックと日本

国際的なスポーツの大会は、競技ごとにたくさんあり、オリンピックよりハイレベルな大会も少なくありません。それでもオリンピックは特別な大会として、多くのアスリートが憧れ、見る者の関心も断然高まります。

その理由は、様々な競技が一堂に集まると

ころにあります。競技を知ることができるだけでなく、選手村が作られ、国や競技を越えて人々が交流する場にもなっています。このことが、オリンピックを別格なものにしています。

1896年に始まった近代オリンピックが日本に紹介されたのは1909年、筑波大学の前身である東京高等師範学校の校長だった嘉納治五郎が、アジア初の国際オリンピック委員に

就任したことがきっかけでした。嘉納は、1940年大会に向けて熱心に招致活動を行い、その精神を受け継いだ人々が、招致ライバル国であったイタリアのムッソリーニ首相に直談判するなどして、東京開催を勝ち取りました。

残念ながら1940年大会は、第二次世界大戦により、開かれることはありませんでしたが、この時も含めて、日本で開催されるオリンピックに

は、復興と平和が常にキーワードに掲げられます。日本人にとってオリンピックは、震災や戦争から立ち直るための糧でもありました。

■国民体育という思想

柔道の創始者として知られる嘉納ですが、国際オリンピック委員への就任を要請されたの

は、日本ではまだスポーツという概念もなかった時代に、その普及に努めた功績からというべきでしょう。

嘉納は体が弱く、いじめられていた悔しさから柔術を始めました。すると、短気な性格が落ち着き、物事を俯瞰できるようになりました。この体験から、柔術を世の中に広めようと考えましたが、流派がいくつもある上、師匠から弟子へ、

口伝で技を伝えるのでは限界があります。そこで、技やルールを文字に書き起こし、体系化して、柔道という新たな競技に発展させました。折しも、知育・徳育・体育という三育主義がイギリスから導入され、これらを兼ね備えた教育ツールとして、柔道は最適でした。

嘉納の弟子たちは、海外に渡って柔道を広めました。柔よく剛を制す、相手の力をうまく利



用することが柔道の基本。体格的に劣る日本人が次々と相手を投げ飛ばすことに、外国人は一様に驚いたといえます。

一方で嘉納は、学校の教科だった「体操」に、武道や西洋のスポーツを融合し、「体育」を構築しました。さらに、年齢・性別や運動能力に関係なく、またお金をかけずに国民みんなができるスポーツ、すなわち「国民体育」として、水泳や長距離走などの普及にも腐心しました。

■自分を高めるためのスポーツ

さて、日本にオリンピックが紹介された3年後の1912年スウェーデン大会には、最初の代表選手2名が派遣されました。その一人がマラソン選手の金栗四三です。東京高等師範学

校の学生だった金栗は、全校行事の長距離走大会で、校長の嘉納に見出されました。以来、本格的に長距離走に取り組み、マラソンの世界記録を出すまでになりました。当時の日本ではまだ長距離用シューズが普及しておらず、独自に改良した足袋を履いての記録達成です。

金栗はオリンピックに3回出場しましたが、猛暑や雨による体調不良や、ペース配分の失敗などのため、一度も完走はできませんでした。この経験から、のちに、一生懸命練習して敗れるのは決して不名誉なことではなく、むしろ賞賛すべきである、と説いています。

マラソンの父といわれる金栗は、箱根駅伝を創設したことで有名です。コース上には旧所名跡が多く、そこを走れば地理や歴史の勉強

にもなるという発想です。また、走る・歩くといった動作は最も基本的な運動で、年齢を重ねても各自のペースで続けることができることから、自ら全国各地を走り、長距離走を推奨しました。目標を持って走ること、そのために努力することで達成感が得られ、品位も向上すると考えたのです。結果だけにこだわらない、人として成長するためのスポーツ、という思想は嘉納の教えに通じています。

■次世代へ伝える無形のレガシー

オリンピックにおける復興や平和というメッセージは、高度経済成長期には、交通網や施設などハード面の整備という形で具体化されました。これらはいわゆる「レガシー」として残って

TSUKU COMM
HEADLINE
聴
INTERVIEW

います。しかし、インフラや経済が成熟した今の日本では、ソフト面のレガシー作りが求められます。

その観点から、2020年の東京大会に向けて取り組まれているのが、オリンピック教育です。オリンピックの理念やフェアプレーの考え方を伝えるための教材を監修し、各学校へ配布しています。1964年の東京大会以来、日本はオリンピック教育に熱心で、今回の教材も充実した内容に仕上がっています。同時に、高校生以上を対象とした、ボランティア育成にも携わっています。

開催国のメリットは、誰もがオリンピックに参加できるチャンスがあるということ。ボランティアとして関わるのはもちろん、応援や観戦を通して、地元ならではの思い出を作ったり、前向き

に頑張る希望を持つことも、オリンピック参加の形です。そういった記憶が次世代へ受け継がれていくことこそが、無形のレガシーになるのです。

■700オリンピックの歴史を総括する

オリンピック史では、最初の古代オリンピックが行われた紀元前776年から、4年毎にオリンピックという単位で数えます。4年というのは中途半端な感じもしますが、当時はボリス（都市国家）によって異なる暦が使われており、そのずれをリセットするタイミングでオリンピックが開かれるようになりました。暦だけでなく、ボリス間の争いごとなどもリセットする意図もありました。

そのように数えると、2020年の東京オリンピック・パラリンピックは第700オリンピックにあたります。その歴史を開催国として総括できるのは、研究者にとっては幸運なこと。ヨーロッパで築かれたオリンピックという文化が、日本でこれほど熱烈に受け入れられるのは、ある意味、不思議な現象です。

その理由として考えられることの一つは、やはり嘉納治五郎の影響でしょう。勝敗を争うスポーツに、教育の視点を加えたことで、日本では「体育」という独特のスタイルが普及しました。これが、国民全体にスポーツを広め、スポーツとの関わり方に多様性を与えたのです。体育の普及に懸けた、嘉納の情熱の源に思いを馳せつつ、700オリンピックを迎えます。

PROFILE

さなだひさし

筑波大学大学院体育研究科修了。博士(人間科学/早稲田大学)。筑波大学体育系教授。つくば国際スポーツアカデミー(TIAS)アカデミー長。オリンピックに関する歴史研究、およびオリンピック教育に関する実践的研究に従事。IOC公認筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長、日本オリンピック・アカデミー副会長、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参与、同組織委員会文化・教育委員会委員。2019年NHK大河ドラマ「いだてん」では、スポーツ史考証を担当。



オマーンオリンピック委員会より
本学に寄贈された盾



装丁家
鈴木成一デザイン室
鈴木成一氏

本に「存在のリアリティ」を与える

書店に行けば様々な本が並んでいます。著者やタイトルを見て手に取ることが多いかもしれませんが、まず表紙に目を奪われるということも少なくありません。本にモノとしての個性を与えるのが「装丁」。電子書籍にはない力強さを生み出します。



装丁家というのは、あまり知られていない職業だと思いますが、どういう仕事で、どのような経緯で始められたのですか。

なりたかったというよりは、ならされてしまったという感じです。学生時代に先輩の手伝いで、鴻上尚史さん(劇作家・演出家)が早稲田大学で立ち上げたばかりの「第三舞台」という劇団の公演ポスターを作るようになりました。その流れで鴻上さんの第一戯曲集のデザインを頼まれたんです。在学四年

の頃です。それが最初ですね。普通は戯曲集なんて注目されないものですが、鴻上さん自身が注目されたおかげで、多くの人に見てもらえて、装丁の依頼が来るようになりました。

装丁は、表紙の図柄だけでなく、本文の組み方にまで関わります。また表紙も、紙質や厚みから加工、印刷方法まで、その本の佇まいにふさわしいものを選ぶなくてはなりません。本というのは不思議なもので、日常の中にありながら、実用性と装飾性の両面を兼ね備え、ひとつの個性として主張します。手

にとって愛でるような、工芸品にも似た、モノとしての奥深さも持っています。装丁の魅力もそこにあると思います。

学生時代から、ということですが、筑波大はそういう活動がしやすい環境だったのでしょうか。

学生の頃はデザインのバイトと授業の課題制作に明け暮れていました。グラフィックデザインというのは、とにかく紙に印刷しなく

ては作品になりません。当時はまだ、パソコンもプリンターもなく、製版や写植など、印刷屋がする作業を全部自分でするわけですが、筑波大にはそのための機材、しかもかなり高価で大型のものまで揃っていて、ほぼ使い放題でした。その環境は本当に良かった。おかげで、印刷表現のあれこれをたくさん学びました。デザインに限らず美術の各分野を極めた先生もたくさんいて、とても刺激を受けました。

とはいえ、筑波大に進学するとは思っていませんでした。高校では美術部の部長をやっている、美術系の進路を希望していましたが、経済的に私立大は厳しいので、漠然と芸大を目指していました。高校当時の担任から推薦枠があると聞いて、初めて筑波大を知ったんです。だから行ってみたいとまげました。田舎にもかかわらず巨大だし、近代的だし。本気でやってみようという気持ちになりました。

哲学書からタレント本まで、あらゆるジャンルを手がけていらっしゃいます。装丁で大切なことはなんでしょうか。

本を出版するというのは、どんなジャンルであれ、それが今、世に広めたいものかということです。書店で平積みになったときに単に目立たせようというのではなく、その本がまさにこのタイミングで存在することの意味というか、リアリティを与えることです。それを目指して、イラスト・写真・文字などあらゆる素材を総動員します。ですから中身を読むことは必須です。子供の頃は読書は嫌いだったのですけど、難解で、ちっとも理解できないこと



もありますが、そういう時は、一読者としての居直りにも近いアイデアがどういふワケか降ってきたりします(笑)。原稿が何百枚、長編小説によっては千枚を越えたりで、割りに合わないような気もしますが、これはもうこの仕事の宿命ですね。お陰様で休日のセラ読みは欠かせません。

もちろん、なかなかビジョンが浮かばなかったり、踏ん切りがつかないこともあります。でも装丁はあくまでも仕事で、自分の作品としてこだわるべきではないと考えています。その線引きとなるのが締め切りであり、著者や編集者のリクエストであり、また内容そのもので、そこから求められるかたちが見えてきます。自ずと客観的な立ち位置になれるんです。長年やってきて、作家性を追求するより、与えられた企画の中で最善を作り出す方が、自分には向いていると感じています。



これまでのキャリアを振り返って、後輩たちにどんなことを伝えたいですか。

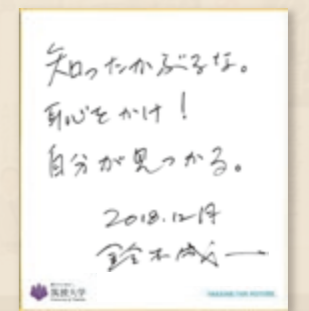
先日数えてみたら、これまでに装丁した本が1万数千冊になっていました。もう30年以上になりますから、ほぼ1日に1冊の計算ですね。多い時には年間800冊も引き受けたのでしょうか。今は、基本コンセプトの指示と最終的な意思決定は自分が行いますが、実作業は7人のスタッフが担当しています。常時、30冊ほどを並行して進めています。

実はこの仕事を始めて10年目ぐらいの頃、辞めようかと迷ったことがあります。目立たない仕事ですし、そのまま続けていいのか、よくわからなくなりました。ちょうど、大学の



講師にならないかという話もあって。そんな時に講談社出版文化賞のブックデザイン賞をいただきました。それでやっと、デザイナーとしての自信と自覚を得た気がしました。

自分は何者か。いろいろな世界に触れ、地道に経験を積み、他者とのぶつかり合いの中で刺激を受けることで、自分のアイデンティティを獲得できるんだと思います。それはまさに、自分の中心に向かって掘っていく作業で、そうやって自分の生き方を削り出していくしかありません。そう実感できるようになったのはここ10年ぐらいのことです。若い頃はまだまだ何者でもない。知ったかぶりをせず、積極的に物事に挑みながら地力をつけてほしいです。



PROFILE すずきせいイチ

1962年 北海道生まれ
1984年 筑波大学芸術専門学群卒業
芸術研究科修士課程中退後、1985年よりフリーに。
1992年(有)鈴木成一デザイン室設立。1994年講談社出版文化賞ブックデザイン賞受賞。エディトリアルデザインを主として現在に至る。「鈴木成一装画塾」講師。筑波大学人間総合科学研究科非常勤講師。著書に「装丁を語る。」「デザイン室」(いずれもイースト・プレス刊)、「デザインの手本」(グラフィック社)

附属学校めぐり

疾風迅雷！ 若い熱意が作り上げる文化の集大成

筑波大学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな先生や授業、行事などの活動を紹介します。

筑波大学附属中学校

附属中学校 学芸発表会

通称「学発」。生徒たちの日頃の学習や課外活動の成果を展示や演説で発表する場として、今年で56回目を迎える。一人ひとりが文化を創造し、それを互いに協力して完成させるという認識が受け継がれており、敢えてお祭りの華やかさを排しながら、「充実した面白さ」「自由な発想」「尽きない探究心」の3要素を意識したユニークな内容が特徴。保護者などの関係者の他、入学希望者も多数訪れ、オープンキャンパスとしての役割も果たしている。

■ 一生懸命に、良いものを

朝方の雨も上がり、気持ちよく晴れた空の下、今年も学芸発表会(学発)が開催されました。生徒たちが、日頃の活動成果を様々な展示や演説で披露する1日です。生徒会をはじめとする各種委員会、部活動や研究会などの活動団体、そしてクラス単位の有志団体などによる、31の展示と14の演説が今回の学発を構成しています。

どの発表からも、生徒たちの一生懸命さと、何事に対しても「より良いものを作りたい」という熱意が伝わってきます。学習活動の報告では、写真も交えて手書きでびっしりと書かれた壁新聞スタイルの模造紙が並びます。実

は、附属中学校は修学旅行発祥の学校。文学ゆかりの地を巡ったり、環境調査や酪農体験など、教科ごとにテーマと行き先を設定する修学旅行は、各自が希望するコースに参加し、3泊4日の最終日に合流して互いの学びを共有する、というユニークなものです。また、1年生の富浦(千葉県)や2年生の黒姫高原(長野県)での合宿も、各学年の特徴的な活動。いずれも、参加すれば語らざるにはられない体験であることが窺われます。

普段の授業や部・研究会活動で制作した作品も展示されています。国語科の作文にもきれいな装丁が施されているなど、幅広い学びの取り組みを見てとることができます。演劇や演奏、ダンスといった演説も、オリジナリ

ティー溢れる演目ばかりで、客席からの声援が絶えません。まさに、この1年の学校生活の集大成が披露される「発表会」です。

■ 生徒の自治に委ねる

この日に向けて、準備委員会が立ち上がったのは前年度の1月。少しずつ準備を進め、4月に新入生を迎えると、3年生を中心に、本格的に動き始めます。先生たちも陰になり日向になり様々なサポートをしますが、企画も運営も、基本は生徒たち自身が考え計画、実行しています。56回目の学発にちなんで今年のスローガン「疾風迅雷〜いいこと5656〜」やポスターのデザインも、校内から公募し、準備委員

会が選定したもの。タイムテーブル作成から、当日の受付や会場案内、各発表での説明まで、すべて生徒たちが行いました。

生徒の自治を重んじるのは、附属中学校の伝統的な校風です。学発での発表も、無条件で参加できるわけではありません。各団体は発表内容をエントリーし、準備委員会による審査を経て、ビジョンや計画がしっかりとっていると認められたものだけがプログラムに加わります。準備のために通常の授業時間を使うことはなく、昼休みや放課後に集中して作業を進めています。

このように、運営する側も発表する側も、学発には相応のエネルギーをつぎ込んでいます。附属中学校では、必ず何らかの部・研究会活動に所属することになっており、2つの活動の掛け持ちもできるため、複数の発表に参



加する生徒もいますが、とにかくどの生徒も快活で積極的。パワー不足の心配はなさそうです。

■ 中学生としての成長

学発のもうひとつの特徴は、中学校のみで開催することです。同じ敷地内に附属高校もありますが、合同の催しにはしていません。中学生と高校生が一緒になると、どうしても高校生がけん引役になるため、真ん中の学年にあたる中学3年生が曖昧な立場に置かれ、中学1年生が子供扱いされてしまいがち。中学生だけで運営することによって、3年生が最上級生としてリーダーシップを発揮することができるように、その様子に触発されて、1・2年生にも、次は自分たちが、という自覚が芽生えます。

そのことが、どの学年でも傍観者になることなく、前年の振り返りや経験を生かし、みんなで知恵を出し合って学発を作り上げていくプロセスにつながります。まだまだ幼さも残る年頃ですが、そうやって、互いのことを知り、それぞれの能力をうまく引き出しながら、成長する機会にもなっています。

■ 夢中になれる協働学習

学発は、一般的な文化祭のイメージに比べると、模擬店も、エンターテインメント的な雰囲気もなく、地味な印象を受けるかもしれません。しかしそれは、あくまでも日常の活動の成果を見てもらうための「学習発表会」であることへのこだわりの証です。

学びのツールが多様化し、必ずしも学校に通わなくても、知識を得ることは可能な時代で



そんな中で、学校という場所で行う教育の意義は、協働学習にあります。附属中学校では、授業にしろ、課外活動にしろ、個人で行う活動はほとんどありません。議論しながら課題を解決したり、それに向かって頑張り抜くこと、そういった力を養うには、みんなで夢中になれる行事が大切。学発もその一つです。

中学生ぐらいだと、男女が別々に行動したり、いつもの仲良しグループで集まることが多いものですが、ここでは生徒たち自らが、様々な場面で、そういったグループやクラスの枠を取り払い、みんなで協力するための工夫をします。また、学業には直接関係しない活動であっても、目標が定めれば手を抜くことはありません。そんな、この世代ならではのピュアな情熱や正義感が素直に現れているところも、学発の魅力アップさせています。



学問と芸術の発表会

小林美礼 副校長

本校は明治21(1888)年に東京高等師範附属尋常中学校として創立してから、昨年で130年を迎えました。昭和24年に東京教育大学附属中学校、昭和53年に筑波大学附属中学校となりました。明治以来の校訓は、「強く、正しく、朗らかに」で、この精神が今も脈々と受けつがれています。

本校の学芸発表会は、いわゆる文化祭ではな

く、「学問と芸術の発表会」という質の高さを求めています。「真の意味で一人ひとりが文化を創造し、それをお互いの協力のもとに完成させる」という精神が第1回目から歴代生徒責任者の中に流れる共通の認識です。このような伝統が今も息づいており、大変見ごたえのあるものと評価をいただいております。学芸発表会は、発表団体の管理や当日の運営など全て生徒の手によって行われ、本校の教育活動の発信はもとより、生徒にとって大きな成長の場となっています。



副校長(左)と学芸発表会担当の細川梨花教諭



躍動 筑波 大生

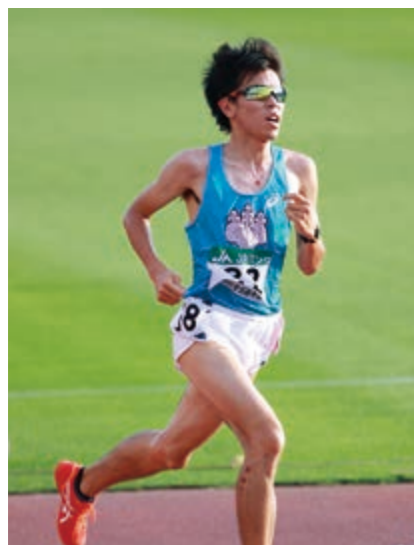
必ず届く

箱根駅伝出場を目指し、2016年から予選会に出場。2018年はキャプテンとしてチームを牽引した。将来の夢はスポーツドクターになって、世界大会に帯同すること。駅伝は後輩に託したが、3000メートル障害でのインカレ入賞を次の目標に走り続ける。

HIROHITO KAWASU

医学群医学類4年 川瀬宙夢さん 陸上競技部

本学では、毎年6月に学生全員の体力測定を行う。その時、医学類の新生入生の中で、圧倒的な速さでトラックを走る川瀬宙夢さんを見て、陸上競技部コーチの榎本靖士准教授(体育系)が声をかけた。「部活は数居が高いと躊躇していたのですが、ずっと憧れてきた箱根駅伝出場を目指すチャンスだと、飛び込みました」。



ところが、1年生の夏合宿では体が追いつかず、疲労骨折をしてしまう。中学からの選手生活を振り返り、栄養と基礎トレーニングを見直した。この経験が自分の体を客観的に捉える力となり、翌年は、春から徐々に自己ベストを更新。解剖実習や臨床実習前試験など学業が多忙な中でも、3年連続で箱根駅伝予選会出場を果たした。

陸上競技部は1994年を最後に本大会への出場がない。そこで2011年に「箱根駅伝復活プロジェクト」が始まった。駅伝復活を目指すと共に、高い競技能力と倫理観に加え、知的探究心をもって自身の能力を高め、社会に貢献できる人材を育成することも目指している。川瀬さんは、このプロジェクトと共に成長してきた。

2018年、主将として箱根駅伝出場に挑んだ。冬季トレーニング、関東インカレ、全日本大学駅伝予選会と、チームは段階的に成長している実感があった。しかし、予選会の結果は17位。出場枠11チームには遠く、目標タイムにも届かなかった。「成長してきたとはいえ、メ

ンバーの体力や走力には差があり、疲労を取り除く、トレーニング強度を上げるといった調整には、難しさもあった。しかしこのチームは、本学の陸上競技部史上、最速の集団であることは間違いないので、この先は未知の領域。約40人の長距離チーム全員が、自分の実力と箱根駅伝との距離を把握して、それを縮めるためにすべきことを必死に、着実に積み上げていけば、必ず届く。悔しさを噛み締めつつ、箱根駅伝出場を後輩に託した。

川瀬さんの夢は選手の思いを理解し、かつ選択を誤ることのないように導くスポーツドクターになること。4年間を仲間と共に走りきった経験は、医師としてもかけがえのないものになるはずだ。



後輩に託す
陸上競技部に入るのに、特別な選考基準はありません。自分に厳しく、自分を楽しみに思える選手が集まって、実際に向上しています。筑波大は考える場を与えてくれ、育てられる。文武両道を目指すなら、ぜひ本学に来てほしいです。



寄り添うことを学ぶ

難民支援サークル「CLOVER」のメンバーとして、牛久市にある東日本入国管理センターに収容されている外国人の人々と定期的に面会し、話を聞いたり日本語教材の提供を行う。2月16日には、国連難民高等弁務官事務所の協力で「難民映画祭」を開催予定。好きな授業は、初等教科教育法。小学生の頃の「できた」が追体験できるから。

TOMOKO TATESHITA

人間学群障害科学類2年 館下智子さん CLOVER～難民と共に歩むユース団体～代表

館下智子さんは「CLOVER～難民と共に歩むユース団～」のメンバーとともに、牛久にある東日本入国管理センターを定期的に訪れ、収容されている難民申請者らと面会している。2018年1月からの半年間に、日本で難民に認定されたのは申請者のわずか0.3%にあたる22人。あとの99.7%は在留期間が終われば出国しなくてはならないが、難民再申請や何らかの事情があって在留する場合は、法務省管轄の施設に収容される。

「戦争、紛争、貧困など理由は様々ですが、収容者には自国に戻ることでできない状況があります。申請がなかなか通らず収容期間が長期化する人も多く、自由な生活も親類との関係も失い、自分は誰からも忘れられてしま

後輩に託す
大学生になって、急に世界が広がったように思いますがそれはこれまでの勉強や先生、友達、家族との日々の積み重ねの上にあるんだと感じています。希望を持って、今の学びを大切にしてください。それは、将来こどもたちにつながっています。



のではないかと不安を抱えています。面会時間は30分と限られていますが、「大学生が興味を持って、会いに来てくれるのはうれしい」と言ってくれます。私たちは、まず、収容者に寄り添うことを大切にしたい。そして、難民の現状を多くの学生に知ってもらい橋渡しをしたい」と館下さんは話す。面会では、施設内での生活、将来への不安、離れて暮らす家族への思いなどに耳を傾け、話す様子から、その人の置かれている環境を推し量る。擦過傷や湿疹などが目立つ場合は、栄養やストレスの問題を疑い、声をかける。

館下さんの夢は、特別支援学校の教諭になること。自閉症の家族がいるため、障害を理解しているつもりでした。しかし高校生の時に、ポ

ランティア活動で肢体不自由の子供と接し、障害によってコミュニケーションの方法が全く違うことを知り、専門的に学びたいと本学へ。留学生や障害のある学生と学ぶのが当たり前前のキャンパスで、多様な人と関わり、世の中には支援を必要とする人が大勢いることも知った。遠い存在だと思っていた難民もそのひとつだ。

「将来、難民も障害のある子も、一緒に学ぶ教室が普通になると思います。その中で辛い思いをしたり、それを乗り越えるためにさらに問題を抱えることにならないように、子供に関わる大人として、様々な価値への理解を深めたい」。

館下さんにとって、CLOVERの活動は、未来の教室とつながっている。



CLOVER～難民と共に歩むユース団体～難民問題啓発イベント



仮放免中の収容者の方に登壇してもらったこと

アルゼンチン共和国

Homeland

筑波大学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。このコーナーでは、本学の留学生が、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介します。

自分のルーツを探る旅

●父のルーツがきっかけで

私の故郷は、首都ブエノスアイレスから車で40分ほど離れたアドログエという小さな町です。そこからブエノスアイレス大学の心理学科に通いました。海外の大学院に進学したいと考えていたところ、友人が文部科学省の奨学金を紹介してくれました。

私の名前には、「ウエハラ」という日本名が入っています。父の両親は日本からの移民で、祖母の家族は今も沖縄に住んでいます。ですから、いつか、沖縄に行ってみようと思っていましたし、メディアを通して知る日本人の社会行動についても関心があったので、色々な意味で自分の希望を叶えるチャンスだと思いました。

将来は、精神疾患治療に役立つ研究をしたいと思っています。奨学金を得て進学先を決める際に、一谷幸男教授(人間系)が私の申請書類や研究計画に関心を示してくださり、ご自身の研究成果についても詳しく説明してくれ

ました。心理学のバックグラウンドを活かして、脳神経科学や精神薬理学を学ぶことは、大きなステップアップに繋がると考え、筑波大に行くことにしました。1年目は研究生として、その後、人間総合科学研究科(博士前期課程)感性認知脳科学専攻に入学し、今は修士論文の仕上げの真最中です。

●フレンドリーで個人主義のアルゼンチン人

この3年間、日本各地を旅行しました。広島、京都、もちろん祖父母の故郷、沖縄県の与那原も訪れました。沖縄の人々はみんなフレンドリーで、言葉のわからない私を温かく受け入れてくれました。この点は、ラテン系のアルゼンチン人と少し似ているかもしれません。アルゼンチンでは、公用語のスペイン語がわからなくても、1週間もすれば一緒にごはんを食べる仲間くらいは簡単にできるでしょう。

そんなフレンドリーなアルゼンチン人ですが、国の発展のために足並みを揃えることが苦手

で、様々な社会問題を抱えています。移民が多いため、人種、文化、ルーツなどそれぞれ異なる背景を持つ多民族性と欧米文化圏の個人主義が相まって、みんなが違うことは当たり前です。でもそのことで、他者に対して「理解しあって、共に進むことができる仲間」という思いを持っていないのかもしれませんが、その点は、日本と大きく異なる社会性だと思えます。

●ブエノスアイレスの文化

アルゼンチンの自然は雄大です。ぜひ訪れてほしいと思います。世界遺産のロス・グラシアス国立公園にあるペリト・モレノ氷河は、南極大陸、グリーンランドに次ぐ大きさです。イグアス国立公園には世界最大の滝があります。アジア以外の七大陸で最高峰のアコンカグア(標高 6,960.8 m)もあります。

でも私が一番好きな場所は、首都のブエノスアイレス。イタリア、スペイン、フランスの影響を受けたヨーロッパスタイルの町並みに、劇場



Uehara Juan Martin

ウエハラ・ファン・マルティンさん

所属 | 人間総合科学研究科(博士前期課程)
感性認知脳科学専攻2年



やコンサートホール、博物館、スタイリッシュなカフェ、レストランなど、文化施設や観光名所がたくさんあります。

ブエノスアイレスはタンゴ発祥の地で、国際大会が開催されるときには、日本からも多くのダンサーが訪れます。音楽的には少し前までは古臭いと言われていましたが、最近ではテクノやロックと融合したエレクトロニックタンゴが若い世代からの共感を得ていて、特に「Bajofondo」というバンドが人気です。

タンゴと並んで、アルゼンチンを代表する文化といえば、やはりサッカーでしょう。世界的に有名なディエゴ・マラドーナも所属していたクラブ、ボカ・ジュニアーズのホームスタジアム「ラ・ボンボネーラ」はブエノスアイレスの名所の一つです。他のスポーツも盛んで、前回のラグビーワールドカップではベスト4、女性柔道家のパウラ・バレットはリオデジャネイロオリンピックで金メダルに輝いています。現役の医師でもあるバレットは国民的なヒーローです。

●シェアするマテ茶

アルゼンチンは世界でも有数の牛肉消費国です。最近、日本とアルゼンチンは生鮮牛肉の相互輸出を解禁したので、スーパーでアルゼンチンの肉が買えるようになるでしょう。帰国しても和牛が手に入るのは楽しみです。

日曜日になると、家族や友人とのんびりと庭でつろぎながら、ワインと一緒にアルゼンチン流バーベキュー「アサード」を楽しむ光景が、あちこちで見られます。薪と炭で牛肉、ソーセージ、豚肉、鶏肉、ホルモンをじっくり焼くのが特徴。そして、食事の後は、アルゼンチンの伝統的な飲み物「マテ茶」が振る舞われます。

お茶と言っても日本茶や紅茶とは全く違います。苦味が強く、「おいしい」と言って飲んだ日本の友人は半数くらいです。専用の茶器に入れて、金属製のストローで飲みます。この入れ物を「マテ」と言うのが名前の由来です。テレビを見ながら、ミーティングをしながら、ス

ポーツ観戦しながらなど、マテ茶をそこにいる人とシェアするのがアルゼンチンの流儀です。

●専門性と自分自身の理解を深める

筑波大で新しい学問を知り、研究者としての基礎的なテクニックを身につけることができました。また、研究面の進歩だけでなく、先進国の強みや良さを実感し、自国を客観的に見られたのは、これからの人生のために良い経験になりました。

修了後は、ブエノスアイレスで博士課程に進み、研究を続けます。そしてチャンスがあれば、今度はイギリスからスペインに渡りたいと思っています。より高度な専門性を身につける上では、使い慣れた言語の方が学びやすいからです。そして、父のルーツのあるアジアの次は、母のルーツであるヨーロッパを知り、新たな視点からより深く自分自身とアルゼンチンを理解したいと思っています。



沖縄県与那原町のマンホール



アルゼンチンから遊びにきた友人と



隅田川でアルゼンチン



ブエノスアイレス近郊の観光名所のひとつ、デルタ地帯、パラナ



タンゴ発祥の地、ブエノスアイレス
写真:久野真一/JICA



パタゴニアにあるペリト・モレノ氷河

筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所 「大明神寮」登録有形文化財に登録

長野県上田市にある、本学山岳科学センター菅平高原実験所の敷地に建つ木造平屋建造物「大明神寮」が、2018年3月27日付けで、登録有形文化財として登録され、その記念式典が10月16日に開催されました。

登録有形文化財(建造物)とは、文化財としての社会的評価を受ける前に失われかねない建造物に対する保存措置を講じるための制度です。2018年10月1日時点で東京タワーなど、11,762件が認定されています。

大明神寮は、本学の前身である東京教育大学の理学部附属菅平高原生物実験所の宿舎

として、1965年10月に建てられました。今回評価されたのは、「高原の緩斜面に建つ。木造平屋建てで北側に廊下を通し、東に4室、西に食堂や風呂などを配す。南面に出窓を設けて二重窓として採光と断熱を図るなど、寒冷な気候に対処するための特異な特徴を備えた大学宿舎」(文化庁文化審議会答申より)ということで、周囲の環境に溶け込んだ佇まいの価値が認められました。

以前から、職員や近隣住民ボランティアにより、毎年、外壁に柿渋を塗るなどの保全策がとられており、近年は、自然観察会などの社会貢献活動の拠点として、大切に使用されています。



イベント

附属図書館特別展「グローバルに挑む群像 —幕末から明治へ—」

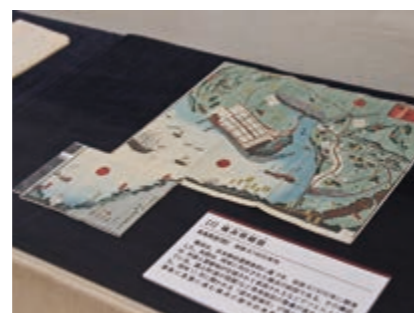
10月29日～11月30日まで、中央図書館において特別展「グローバルに挑む群像 —幕末から明治へ—」が開催されました。本特別展は、幕末・維新时期から明治前半期を中心に、世界に挑戦した人々の姿を本学所蔵の貴重資料から取り上げ、日本近代のあり方を考えていくものです。2018年は明治元年から満150年にあたることから、「明治150年」を記念する本学における取り組みとなりました。

展示は3部構成となっており、第1部では本学前身の師範学校創設の地、「昌平坂学問所」の儒者と対外交渉への関わりをうかがい知ることができる資料を、第2部では「幕末関係記録」や「長州藩士記録」を中心に、開国による動乱の時代を生きた人々にフォーカスしました。第3部では明治を拓いた名著を紹介し、全体として49点の貴重資料が公開されました。

本学教員による特別講演会やギャラリートークも開催され、会期中を通して学内外から延べ2,080人が訪れました。

なお、附属図書館特別展は毎年開催され、それぞれのオフィシャルWebサイトが公開されています。

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/special-exhibition>



横浜明細図



西洋道中膝栗毛

イベント

筑波大学学園祭「雙峰祭」



11月2日～4日にかけて、第44回筑波大学学園祭「雙峰祭」が開催され、延べ33,000人が来場しました。総合大学ならではの幅広い分野を網羅した学術展示、芸術を専攻する学生による制作展示、大迫力のステージパフォーマンス、個性的な模擬店など、350以上の企画が筑波キャンパスを彩りました。最終日には、本学附属病院に入院中の子供たちが描いた絵をイメージした創作花火が夜空を飾り、3日間のイベントを締めくくりました。

本との新しいふれあいを——Library For All



11月23日、サテライトオフィスにて学群生の企画による「Library For All」が開催されました。読み聞かせや本の1シーンを元にした大喜利、豆本作り体験、本の表紙や題名から内容を推察する想像力のリレーなど、工夫を凝らした活動を通じて、市民や学生に色々な形で「本」に触れ合う機会を持ってもらうためのイベントです。

主催者の福嶋一菜さん(知識情報・図書館

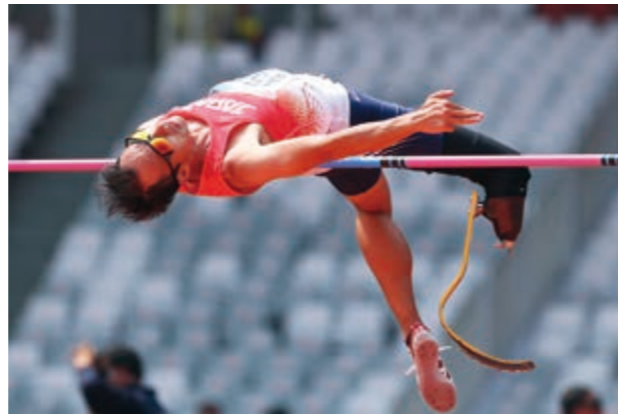
学類1年)は、「『本』には様々な関わり方があり、読むことだけがすべてではありません。この催しが、それに気づききっかけになれば嬉しい。」と語ります。参加者は、学生たちと和やかにコミュニケーションを取りながら、読み聞かせに耳を傾けたり、大喜利でどう上手く答えるかを考えたり、思い思いの形で「本」との出会いを楽しんでいました。

卒業生の活躍

インドネシア2018 アジアパラ競技大会で卒業生が活躍

10月6日～13日にジャカルタ(インドネシア)で開催された、インドネシア2018アジアパラ競技大会で、本学および附属視覚特別支援学校の卒業生13人が日本代表選手として24種目に出場し、熱戦を繰り広げました。

今大会で両校卒業生は、金10個、銀5個、銅7個のメダルを獲得しました。素晴らしいプレイで魅了してくれた選手の皆さんの今後の活躍にも注目です。



鈴木徹(写真:長田洋平/アフロスポーツ)

「インドネシア 2018 アジアパラ競技大会」結果

競技	氏名(現所属)	卒業年度	種目	結果
陸上競技	鈴木 徹 (SMBC 日興証券)	2017 人間総合科学研究科修了	走り高跳び	銀メダル
			走り幅跳び	9位
水泳	山田 拓朗 (NTTドコモ)	2013 体育専門学群卒業	50m自由	金メダル
			100m自由	金メダル
			200m個人メドレー	金メダル
			4×100m自由メドレーリレー	金メダル
			4×100mメドレーリレー	銀メダル
			バドミントン	藤原 大輔 (LINE)
陸上競技	堀越 信司 (NTT西日本)	2003 普通科	5000m	金メダル
			1500m	銅メダル
	高田 千明 (ほけんの窓口)	1999 中学部	走幅跳	銀メダル
			谷口 真大 (ダイアログインザーク)	2009 普通科
水泳	木村 敬一 (東京ガス)	2009 普通科	100m背泳	金メダル
			100m平泳	金メダル
			100m自由	銀メダル
			200m個人メドレー	金メダル
			50m自由	金メダル
			50m自由	銅メダル
柔道	小野 智華子 (あいおいニッセイ同和損害保険)	2016 鍼灸科	100m自由	銅メダル
			200m個人メドレー	銅メダル
ボウリング	森 寛樹 (全日本視覚障害者ボウリング協会)	1993 鍼灸科	個人戦	銅メダル
ゴールボール	天摩 由貴 (マイテック)	2009 普通科	団体戦	銀メダル
			女子	若杉 遥 (ALSOK)



藤原大輔(写真:長田洋平/アフロスポーツ)

Diversity Week 2018

10月10日～12日まで、筑波キャンパスで「Diversity Week 2018」が開催されました。昨年に続き2回目となる本イベントは、性別、国籍、文化の違い、年齢、障害の有無にかかわらず、人の可能性と多様性を尊重し、学びあえる大学、個性と能力を発揮できる共生キャンパスの実現を目指し、一人ひとりが「ダイバーシティ(多様性)」について、様々な体験を通して、楽しみながら考えるきっかけにしようというものです。

アダプテッドスポーツ、障害疑似体験、写真展、上映会など計6つのコーナーを、教職員と学生が協働して企画しました。期間中は延べ150人以上が参加し、身近にあるダイバーシティを知る機会となりました。参加者からは、「ダイバーシティを考えるきっかけになった」、「自分らしさを見つめることができた」などの声が聞かれました。本学では今後も継続して、こうした取り組みを進めていく予定です。



視覚障害の世界を体験中



図書館での写真展とブックフェア



アダプテッドスポーツを適用したボッチャを体験

社会貢献

ヤングアメリカンズつくばスペシャル2018



11月9日～11日の3日間、大学会館において「ヤングアメリカンズつくばスペシャル2018」が開催されました。

ヤングアメリカンズとは、若者の素晴らしさを音楽を通して社会に伝えようと、アメリカで設立されたNPOです。世界各国から選ばれた若者(キャスト)40数名が各地を訪れ、地

元の児童生徒とともに歌と踊りのワークショップを行い、その成果を、最終日の夜に1時間のショーとして披露するものです。

本学では、2013年から毎年このイベントを招致しており、今回が6回目となります。本学職員、学生、地域住民が一体となって企画運営をサポートし、ワークショップでは、近隣の小中高生に加えて、本学の学生や大学院生も参加するのが特徴です。

3日間のワークショップを終え、満員の観客席を前に、ヤングアメリカンズ、小中高生、筑波大生からなる総勢300名が、圧巻のショーを繰り広げました。

参加者からは、「素晴らしい体験をさせてもらえて感謝しています」「ショーを成功させた後の子供達の充実した笑顔を見て、参加して本当に良かったと思います」など、満足の言葉がたくさん寄せられました。また、グローバル化やダイバーシティを意識する場にもなりました。

タジキスタン大統領とマレーシア首相に名誉博士称号を授与

10月14日にタジキスタン共和国のエモマリ・ラフモン大統領が、11月5日にマレーシアのマハティール・ビン・モハド首相が、それぞれ本学東京キャンパスを訪れ、永田学長より名誉博士号の学位が授与されました。

本学はこれまでに、タジキスタン共和国のロシア・タジク・スラヴ大学およびタジク国立言語大学と、また、マレーシアのケバンサアン・マレーシア大学、マラヤ大学、ウタラマレーシア大学およびプトラマレーシア大学と、学術交流協定を締

結し、両国との交流を進展させてきました。授与式では両氏とも、日本との関係強化の重要性や、研究教育分野における本学とのさらなる協力に対する期待を述べられました。



タジキスタン共和国大統領のエモマリ・ラフモン氏



マレーシア首相のマハティール・ビン・モハド氏(左)と永田恭介学長

イベント

嘉納治五郎・金栗四三 特別展

本学の前身、東京高等師範学校の学生で、日本初のオリンピック選手となった金栗四三、そして彼を見出し、その後も深くオリンピックと関わり、こととなった校長の嘉納治五郎。日本のスポーツ教育を切り拓いた、本学ゆかりの二人を中心に、本学の歴史を振り返る特別展を1月22日からおよそ1年にわたり、学内各所で開催します。

期間：2019年1月22日～12月25日
 会場：筑波大学(体育ギャラリー、総合交流会館、筑波大学ギャラリー、東京キャンパス)、筑波大学サテライトオフィス・つくば市交流サロン(BiViつくば)
 主催：国立大学法人筑波大学
 後援：つくば市
 協力：茨城県、熊本県、(熊本県)玉名市・和水町・南関町、東京都文京区
 お問い合わせ：029-853-2178
 ※詳細は本学HPをご覧ください



題字：中村伸夫(本学芸術系教授)

RESEARCH TOPICS

行動抑制能力の低下とドーパミン神経の関係を解明

健全な社会生活を送る上では、衝動的な行動や不必要な行動を抑えるべき局面が多々あります。野生動物においても、そのような行動は不用意に危険に身をさらすことであり、命取りになりかねません。

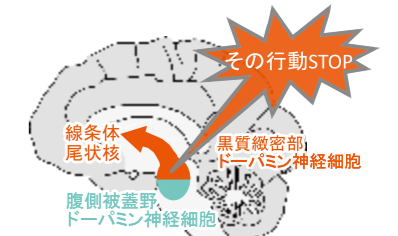
精神・神経疾患では、行動抑制能力に障害が出る例が知られています。たとえば、注意欠陥多動性障害(ADHD)の子供は、授業に集中できなかつたり、パーキンソン病の患者は、歩いているときに急に止まることができないといった症状を示します。

これまでの研究で、そうした疾患に共通する原因として、中脳の黒質緻密部と腹側被蓋野と呼ばれる領域にある、ドーパミン神経細胞を起点とする神経系に異常が見られることがわかっていました。しかし、ドーパミン神経系のどのような作用

によって、衝動的な行動や不必要な行動が抑制されているのかは、解明されていませんでした。

医学医療系の松本正幸教授は、アカゲザルを用いた京都大学との共同研究により、行動の抑制が求められる認知課題を訓練した上で、課題遂行中のサルの中脳の黒質緻密部と腹側被蓋野におけるドーパミン神経細胞の活動を記録しました。その結果、黒質緻密部のドーパミン神経細胞から出た、不適切な行動を抑制するための神経シグナルが、線条体尾状核に伝達されていることが確認されました。

この発見は、ヒトでも、黒質-線条体ドーパミン神経路が、精神・神経疾患に見られる、不適切な行動を抑制できない症状の治療ターゲットとして、有力な候補であることを示唆しています。今後の研究の進展が期待されます。



黒質-線条体ドーパミン神経



記者会見に臨んだ松本教授

飲み放題はやめよう!! —— 大学生の飲酒量を2倍近く増やす

アルコールの過剰摂取は、個人としても社会としても弊害が多く、世界的に問題視されています。過剰摂取を防ぐ施策として、世界保健機構(WHO)は2009年に「一定料金での無制限飲酒(flat rate for unlimited drinking)」、日本で言う「飲み放題」サービスの提供禁止・制限を提言しました。

しかしながら、「飲み放題」サービスが飲酒行動にもたらす具体的な影響については、これまでほとんど調べられてきませんでした。そこで、医学医療系の吉本尚准教授と大学院生の川井田恭子さん(大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻 博士課程2年)らの研究グループは、関東の31大学35学部の学生533人を対象に、飲食店における飲み放題に関する横断的調査を行いました。

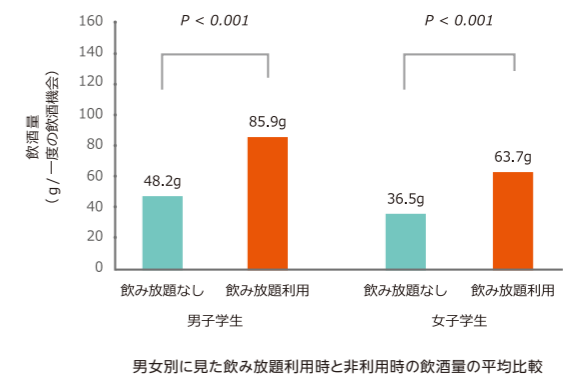
「飲み放題」を利用したことがあると答えた511人(95.8%)を対象として、飲み放題の利用

と大学生の飲酒量の差異を調べたところ、飲み放題利用の場合の飲酒量は、そうでない場合に比べて、男子学生で1.8倍、女子学生で1.7倍に増加していました。また、男子学生の39.8%、女子学生の30.3%が、飲み放題利用の場合にのみ、HED(一時的多量飲酒)という危険な飲酒をしていることがわかりました。

飲み放題利用時には、アルコール摂取量が2倍近く増えているというのは由々しき現実です。日

本では「アルコール健康障害対策基本法」に基づき、「アルコール健康障害対策推進基本計画」が2016年に策定されています。しかし、アルコール飲料が24時間購入できたり、多くの飲食店が競うように飲み放題サービスを提供するなど、アルコール摂取に対して寛容な土壌があります。

若者に対する飲酒マナーの教育を進めると同時に、飲食店のサービス提供の在り方についても、社会的な議論を喚起する必要があります。



つくりんピック2018

つくりんピックは、障がいのある人もない人も集まって、みんなで身体を動かしてスポーツを楽しむ、という趣旨の元、アダプテッドスポーツについて学ぶ学生が、地域の方々とスポーツを通して交流するイベントです。2004年から始まったつくりんピック、今年は「平成最後だよ全員集合!」というテーマで、大学院体育学専攻の授業「体育授業観察分析法II」受講生29人が企画運営にあたり、体育専門学群生65人もそのサポートに

加わりました。12月9日の開催当日には、約250人が中央体育館に集まり、いきいき茨城ゆめ国体・ゆめ大会(全国障害者スポーツ大会)のマスコット「いばらっきー」も登場して、イベントを盛り上げてくれました。

会場には、学生たちが「引き出した動き」をもとに考案した「ダンスパワーでサンタをすくえ!」、「ロボットスーツをつくろう!」、「シゲパンダにあいこ!」の3つのブース、毎年恒例のポッチャ、ス

トラックアウト、ボールプール、そしてアダプテッド体育・スポーツ学研究室の3年生による「クリスマスツリーのかざりをゲットしよう」のコーナーが設けられ、障害の種類や程度に合わせて課題や支援方法を柔軟に変えていく「アダプテッドの視点」を生かして、みんなで楽しく体を動かしました。

最後には体育を専攻する学生ならではのスポーツパフォーマンスが披露され、会場は大いに盛り上がりました。



クリスマスツリーのかざりをゲットしよう



つくりんピック2018、参加者のみなさん

ミニ展示「パレオパラドキシアを復元してみた!」

12月3日~1月31日まで、本学サテライトオフィスにてミニ展示「パレオパラドキシアを復元してみた!」を開催しています。

パレオパラドキシアは2300万~1000万年前に生息していた哺乳類です。その骨の化石が、60年以上前に本学に預けられたが、詳しいことがわからないまま、忘れられてい

ました。最近の保管庫調査の際に偶然、再発見され、残されていたわずかな手がかりを頼りに、化石の発掘場所や骨の部位などの特定に成功しました。また、それらの情報をもとに、全身骨格をデジタル復元し、3Dプリンタを用いて立体模型を作成しました。

会場では、パレオパラドキシアの骨の化石

(実物)と全身骨格の復元図およびその立体模型を展示するとともに、たった1つの化石から全身像が復元されるまでの研究プロセスに秘められた、とても興味深いストーリーを紹介しています。訪れた人々は、迫力ある化石の実物と精緻な立体模型に見入っていました。



世界のトビラ

筑波大学は、海外の教育研究機関と連携し、学生・教職員の受け入れや派遣、交流イベントの開催など、国際的にも「開かれた大学」を目指して、さまざまな活動を展開しています。

世界のキャンパスを舞台に高大連携

本学の海外13拠点のオフィスでは、現地大学を活用したワークショップ、ショートプログラムに参加する学生、教員への情報提供や渡航支援を行っています。米国拠点アーバインオフィスでは、2018年8月、本学と高大連携協定を結んでいる茨城県立土浦第一高等学校の海外研修をサポートしました。

スーパーグローバルハイスクールに指定されている土浦第一高等学校の生徒10人と教員2人が、その活動の一環としてアーバインオフィスを訪れました。彼らは「茨城ローカルのリソースを活用した、国際的に受け入れられる商品またはサービスの開発」をテーマに学習を進めています。すでに商品開発の企画をまとめており、今回のアメリカ研修は、そのブラッシュアップが目的です。アーバインオフィスはカリフォルニア大学アーバイン校(UCI)内に設置されていることから、高校の先生方やUCIの関係者とともに、研修プログラムの作成、ビジネスピッチ(プレゼンテーション)コンテストの開催を支援しました。

一週間の滞在中に、UCI日本語学科の学生との交流、日本企業Horiba Instruments社への訪問、日本貿易振興機構ロサンゼルスオフィスによる「日本の製品を海外市場で展開するチャンスと難しさ」に関する講義、UCIの学生を対象とした路上インタビューによる市場調査などを経て、最終日には、UCIの起業拠点コミュニティ「Applied Innovation」でビジネスピッチコンテスト「Tsuchiura Daiichi High School "Super Global" Program - Junior Japanese Entrepreneurs -」を実施しました。同時期にUCIを訪れていた本学システム情報工学研究科の学生達が、ビジネスピッチコンテストにオブザーバーとして参加するコーディネートも行いました。



アーバインオフィスより



当オフィスでは、現地研究者や研究機関と連携・協力した活動に関するコーディネートを行っています。また、本学関係者が訪問した際に、それぞれのニーズに合わせた現地サポートを行っています。本学とUCIは研究協力における Campus in Campus

協定を結んでおり、特に生命科学、工学、スポーツ医学の分野での交流が盛んです。学群生から大学院生まで、相互に学生を派遣する様々な教育研究プログラムが実施されています。

(アーバインオフィス現地コーディネーター 川内紫真子)



ツクバで ツナガる リレー メッセージ

5000人を超える教職員がいる本学。

それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。



病院総務部
品質・安全管理課
塚原宏隆さん

私の趣味は高校生の時に始めたスノーボードです。毎年、職員同士でスノボ旅行を企画して、今年で5回目になりました。この旅行をきっかけに始めた初心者の方も多く、12月の人工雪で転ぶととても痛いですが、楽しい!またやりたい!と言ってもらえるとても嬉しいです。よしっ。私も新しいことにチャレンジしようと、昨年夏から先輩職員に教わりサー

フィンを始めました。板に乗るのは同じなので案外楽勝!?と思っていましたが、これが全く感覚が違ってすごく難しい。同じなのは、どちらも終わった後のビールがおいしいことくらいでした。

筆者左端

スノボもサーフィンも!

BATON 01

NE XT
今回は、病院総務部経営戦略課の谷津恵介さんです。「附属病院を支える次世代職員の筆頭。公私ともに尊敬する先輩です」

着物で暮らす



NE XT
今回は、人間系の唐木清志さんです。「相談事にも、即行動してくださる人間系にはなくてはならない頼れる先生です」

BATON 05

人間エリア支援室
小林とよみさん

週末は着物で過ごしています。家事もしますし、買い物にも行きます。昨今は高価なイベント用の衣装と化している着物に危機を感じているところですが、日本の文化である「普段着物」の良さを自らも体感し、またアピールしていきたい。ワンピースを着る感覚で着てほしいのです。筑波大学では、私の知る限りでは、2名の男子学生が着物で通学しています。感激!また、男子留学生が洋服の上に、上着代わりに羽織を羽織っているのを目撃。留学生たちにも、日本の着物文化を体験してもらえたらと思っています。

BATON 02

芸術系
黒田乃生さん

大学院の世界遺産専攻で研究したり教えたりしています。主な研究対象地は白川郷です。世界遺産専攻は白川郷にある茅葺き屋根の合掌造り家屋「花植家」の利用契約を結んでいます。大きな合掌造り家屋に滞在して調査やワークショップ、授業をしています。今年は私のゼミの修了生で中国からの留学生が白川村の正職員になりました。観光課でインバウンドの対応をしています。そのほかに、石見銀山や富岡製糸場では大学院生が子どもたちと一緒に世界遺産について考える「世界遺産学習」にも取り組んでいます。

研究フィールドは白川郷



筆者前列左端

NE XT
今回は、システム情報系の渡邊俊さんです。「夫です。専門は建築計画で、GISなどを駆使してコンピュータで難しそうな分析をしています」

BATON 06

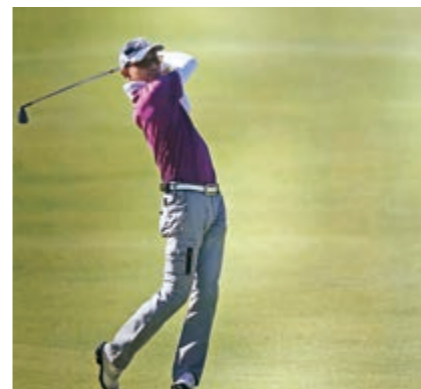
体育系
LYRAS ALEXISさん



NE XT
今回は、体育系の真田久さんです。「I nominate Sanada Sensei, the chairman of our program and it would be wonderful to elaborate and follow up on this topic with content related to Olympian and Japanese heritage- as it relates to the upcoming Games in Tokyo (and Kano sensei)」

Olympia-(dō) Universality of Olympism for Humanity in Action

As I enter a new cycle of life - I go back to the foundations and rationale that brought me to Japan, a country, rich in culture, history and heritage. The main drive that led me was my strong commitment and desire to further contribute to the efforts and establishment of an Olympism for Humanity in Action enterprise- connected to universal virtues and humanity. Building on the work I have been engaged in over the last thirty years and the synthesis of a concept note and the vision for establishing a global and sustainable academic initiative- led me in the land of the rising sun- to embrace the impact of the upcoming Olympic Games in Tokyo. My main drive- and vision is to establish a global academic venture, called Olympia-(dō) and it aims to serve as a bridge between east and west- by embracing universal virtues and heritage that embrace human progress and prosperity



ゴルフを通じた仲間づくり

リハビリテーション部の丸山君からゴルフつながりでまわってきましたので、引き続き、ゴルフの話題を。私は今年度から体育系の所属になりましたが、昨年度までの11年近くは医学医療系の所属でした。その前は体育系にいたのですが、医学に移ってから、講座の秘書のススメでゴルフを始めて10年。ゴルフを通じてたくさんの仲間ができました。つくば市内はもちろん、茨城県内の様々なゴルフ場を回っていて、その数100以上!これだけの数のゴルフ場が車で1時間以内の距離にあるなんて、つくばは本当に良いところですよ。

体育系
中田由夫さん

BATON 03

NE XT
今回は、体育系の奈良隆章さんです。「一時、同じ医学医療系で勤めていた間柄。ものすごいチェンジアップを投げる元野球選手です(笑)」

BATON 07

医学医療系
金丸和正さん



最高の研究環境

免疫学研究室でアレルギーに関する研究をしています。研究室に在籍する約30名が異なるテーマを研究しているため、議論の幅が広く、お互いを助け合う良い雰囲気があります。一方、研究を推進させる強い意欲も研究室には存在し、そのようなバランスの中で研究できることを幸せに思います。また、つくば市には筑波大学を含む様々な研究グループが存在し、共同研究を行う環境に恵まれています。研究室とつくば市の今後の発展と共に、自分自身の研究に没頭したいと思います。

NE XT
今回は、医学医療系の永井恵さんです。「研究を含む様々なことで大変お世話になりました。時に厳しく、楽しい時間を共に過ごさせて頂きました」

BATON 04

国際室
二ノ宮崇司さん

知られざるカザフスタン文化



筆者右端

筑波大学アルマトイオフィスのコーディネーターとして、カザフスタンに住み始めて4年がたちます。この国に対して具体的なイメージを持っている日本人は少ないかもしれません。カスピ海やウィンタースポーツなどが有名ですが、特に馬の料理がお勧めです。そこには馬肉ソーセージや馬乳酒がありますが、冠婚葬祭に欠かせない品です。カザフスタンでは、カザフ語とロシア語が生活でも仕事でも同じ程度使用されています(英語は町中ではほとんど通じません)。両方の言語をごちゃ混ぜにしてしゃべるカザフ人にはいつも驚かされます。

NE XT
今回は、グローバル・commons機構の農嶋明美さんです。「国際室で仕事しはじめた時、手取り足取り教えてもらいました。繊細かつパワフルかつとても朗らかな方です」

植物園が楽しい!

BATON 08

人間エリア支援室
今泉真智子さん



筆者中央

5年前に、筑波実験植物園の「きのこ展」で、好きな色の樹脂粘土をきのこの型に詰めてマグネットを作るという製作をしてから、きのこグッズに興味湧き、毎年、同植物園で子供達と体験コーナーでの製作や園内の散策を楽しんでいます。園内で見ごろの植物のスタンプラリーもできるので、子供達は地図を片手にスタンプ探索に夢中。「こっち来て」「あっち見てきて」と伸び伸び動き回り、歩いて歩くのはいい運動になります。

NE XT
今回は、人文社会エリア支援室の松坂崇さんです。「初めて総務の仕事を担当した部署で、丁寧に教えていただいた親しみやすい先輩です」

IMAGINE THE FUTURE.

本学のブランディングは、平成21年に筑波大学のアイデンティティ(UI)の確立を目指すための、「筑波ブランド」構築の検討を始めたことに端を発します。“筑波らしさ”＝“筑波ブランド”を包括し、ブランドスローガンである「IMAGINE THE FUTURE.」と共に本学が学内外に伝えたいメッセージです。

想像しよう、未来を。
地球の、環境の、
社会の、未来を。
想像できなければ、
創造はできない。
この星の未来は、
失敗できない。
創造しよう、未来を。
共に生き、持続できる、
開かれた未来を。
その扉をあける、
挑戦者になろう。



“国際オリンピック競技大会には従来日本選手を派遣すること無之候ひしが。(中略)我が國よりも選手を派遣せんとの計畫を立てられ昨秋羽田運動場にて其の豫選會を舉行せられ候處本校地理歴史部第二年生金栗四三氏は二十五哩マラソン競争の選手として羽田横濱間往復に二十五哩を僅々二時三十四分時間に疾走して第一等の成績を得たれば東京帝國大學法科四年三島彌彦氏と共に日本選手として派遣せらるゝ事と相成りしは過ぎぬる二月の事に候。”

「彙報 東京高等師範學校だより
金栗選手渡歐」
青海生

『教育』 第351号(1912年)
筑波大学附属図書館収蔵



1912(明治45)年、東京高等師範学校の学生だった金栗四三が、第5回オリンピック(ストックホルム 1912年)のマラソンに、日本人初のオリンピック選手として出場することになりました。

スポーツシューズどころか、まだ日本では靴を履く習慣がない時代、金栗は足袋の底を3重に改良して大会に挑みましたが、完走することはできませんでした。後の回想で、次のように述べています。「日本は當時固いアスファルトや、コンクリートや石道はなく、柔軟な泥道

でした。固いコンクリート道を普通の薄いタビ底のタビで走れば、足の関節や筋肉に故障が起こりやすく、私もストックホルムの走路で膝関節を痛めました」(「マラソンの思い出」『体育の科学』1956年より)。

金栗は、その後もランナーとしてオリンピック入賞を目指すとともに、箱根駅伝の開催など、競技スポーツの普及と女子体育の振興に取り組みました。

筑波キャンパスには、「金栗四三の練習用の足袋」が展示されています。

Events Calendar

1

January

- 13日(日)・第3回ボランティア育成セミナー[東京キャンパス]
[20日: 附属中・高等学校桐蔭会館]
- 19日(土)・大学入試センター試験(～20日)
・City Chat Café [LALAガーデン]
- 22日(火)・嘉納治五郎・金栗四三 特別展(～12/25)

2

February

- 4日(月)・秋ABCモジュール期末試験(8日～14日)
- 16日(土)・春季休業(～3/31)
- 17日(日)・City Chat Café [LALAガーデン]
- 18日(月)・2018 BEST FACULTY MEMBER 表彰式
・入学試験「私費外国人留学生特別コース入試(編入学)」(～3/8)
- 23日(土)・附属学校教育局公開教員研修会・附属学校研究発表会[東京キャンパス]
- 25日(月)・入学試験「前期/私費外国人/編入(社会)」(～26日)
入学試験「編入第2次(医療科学)」
- 26日(火)・入学試験「私費外国人留学生特別コース入試(1年次)」(～3/8)

3

March

- 1日(金)・附属駒場高等学校卒業式
- 8日(金)・附属坂戸高等学校卒業式
・合格発表「前期/私費外国人/編入(社会)/編入第2次(医療科学)」
- 12日(火)・入学試験「後期」
- 13日(水)・附属久里浜特別支援学校卒業式
- 15日(金)・附属中学校、附属視覚特別支援学校、附属聴覚特別支援学校、附属大塚特別支援学校、附属桐が丘特別支援学校卒業式
- 17日(日)・第2回なないろスポーツフェスタ[洞峰公園]
・City Chat Café [LALAガーデン]
- 18日(月)・附属高等学校卒業式
- 20日(水)・附属駒場中学校卒業式
・合格発表「後期」
・行動神経内分泌学研究会の最前線に関する日中2日間シンポジウム[総合研究棟D](～22日)
- 22日(金)・平成30年度T-ACT下半期活動報告会[総合研究棟A]
- 23日(土)・附属小学校卒業式
- 25日(月)・卒業式
・大学院学位記授与式
- 26日(火)・春の進学説明会(～28日)[東京キャンパス]
- 29日(金)・合格発表「私費外国人留学生特別コース入試(1年次、編入学)」
- 31日(日)・学年終了

